て自然のことにして、從て彼等の用ゐたるソグド文字も、此の間に此等の地方に於るトルコ族に傳へられ、其の言語を寫すに用ゐらるゝに至りしものなるべし、然もソグド文字がトルコ族の間に入り、所謂回鶻文字の體に於て使用せらるゝに至りしは、果して何時よりの事なるかは、尙現存資料によりては明らかならず、只だ茲に掲げたる突騎施の貨幣によりて、遲くも八世紀の前半時代に當り、回鶻の據りたる地には非ざる天山地方に於て、既に之が行はれたりしものなることは充分に證明し得らるゝ所なりとす。

第四章　回鶻文字といふ名稱

前に述べたる所により、回鶻文字の系統と、遲くも八世紀の前半に於て之が行はれたる地方とを明らかにせり、然るに此の時代に於ては回鶻は尙漠北オルホン河谷の地に據り、未だ天山地方に據るには至らず、[80] 而して其の書記に於ては突厥文字を使用し、未だ所謂回鶻文字を用ゐたる證跡の存せざること、また前に述べたるが如し、果して然らば回鶻文字といふものは、回鶻人が之を使用するに先立ちて、既に存在し、他のトルコ族によりて使用せられたるものにして、若し此の名稱を以て、普通の場合に於るが如く、回鶻人の創製したる、若しくは回鶻人の間に初めて行はれたる文字の義と解釋すれば、名實の間、甚だしき矛盾の存するものなるを知らざる可らず、抑も回鶻文字といふ名稱は、余の知る所を以てすれば、蒙古時代には普通に行はれ、[81] Carpine, Rubruquis 等の旅行記中にも其の名を記せるが、蒙古人が之を襲用して蒙古文字を作製したりしより、特に其の名稱の喧傳せらるゝに至りしものなるが如く、[82] Rashid-eddin の Tarikhi-Jihankushai 元朝祕史、元史塔塔統阿傳、蒙韃備錄、高昌偰氏家傳等にも其の名